発表日：2016年10月23日

第10回　NPO法人 ニューマン理論・研究・実践研究会 対話集会

緩和ケア病棟における患者・家族にとっての意味深いケア環境の創出過程の可視化

～ミューチュアル・アクションリサーチの手法を用いて～

氏名：宮原　知子
所属：神奈川県立がんセンター

がん終末期にある患者とその家族が、苦悩の真っ只中にあっても、がん体験がその人にとって意味深い体験となるようなケアを提供することをめざす看護師とは、どのような看護師なのでしょうか。さらに、このような看護師は、どのように創出されていくのでしょうか。今回私は、緩和ケア病棟において、がん終末期にある患者の最期が、‘患者とその家族にとって意味深い体験’となることをめざして、看護師である研究者と実践家看護師が協働し、自らが‘患者・家族にとっての意味深いケア環境’になるべく変容していく過程を探求し、その過程の可視化と、その過程に潜む推進力を明らかにすることを目的とした研究に取り組みました。

研究デザインは、参加型の探求のパラダイムのもとで、Margaret Newman の拡張する意識としての健康の理論を枠組みとして、ひとつの緩和ケア病棟をフィールドとしたケース・スタディです。研究フィールドに所属していた看護師である研究者（私）は、Martha Rogers と Newman 理論を踏まえたミューチュアル・アクションリサーチ（以下、MAR）の手法を採用し、日々の実践を担う看護師である研究参加者らと協働しました。患者・家族にとって意味深いケア環境を創出すことをめざした定期的な「対話の会」を開催し、研究者と参加者らは、実践事例をもとに内省と自分たちのケアパターンの認識を奨励しあう過程を体験しました。データは、「対話の会」の逐語録、参加者らのジャーナル、研究者のフィールドノートとジャーナルでした。分析方法は、理論を踏まえ、本研究目的に即してデータから重要な部分の意味を抽出し、変化の観点から相対的に見比べました。武蔵野大学看護学部研究倫理委員会ならびに研究施設の看護研究倫理審査会の承認を得ました。

本研究結果は、20回の対話の会を通して、（1）MARの過程を通して現れた‘緩和ケア病棟における患者・家族にとっての意味深いケア環境’を創出していく過程の可視化、（2）MAR過程に見られた参加者各人の変化と成長の過程、（3）MARを通して、参加者、研究者、患者とその家族、ならびにその周囲に生じ、波及した変化と成長の過程、（4）MARの過程に潜んでいた推進力の4側面からなります。

これらの結果をもとに、‘看護理論が実践にもたらす意味とは？’、‘患者・家族にとって豊かなケア環境としての看護師に自分がなっていくためには？’、そして‘そのような看護師に向かって成長を促進する環境とは？’、‘ミューチュアル・アクションリサーチの可能性は？’など、皆さまと自由で開放的な対話を通して、これらの知見が、皆さまの実践の変革に向けて役立つことを心から願っています。